

## 大学病院における終末期がん患者に対する持続的鎮静の施行状況

野澤孝子、岡本禎晃、恒藤暁 他 Jpn.J.Pharm.Palliat.Care.Sci. 5:83-90(2012)

## 【要旨】論文より抜粋

苦痛緩和のための持続的鎮静は終末期がん患者において議論になっているが、大学病院におけるその実態は把握されていない。そこで、大学病院における死亡前 72 時間の終末期がん患者に対する持続的鎮静の実態調査を行った。大阪大学病院医学部付属病院で 2008 年 1 月 1 日から 2008 年 12 月 31 日の間に死亡退院したがん患者 119 人を対象に、診療記録をもとにレトロスペクティブに調査した。持続的鎮静は 32.8% の患者で施行された。鎮静剤としては、ミダゾラムの静脈内投与が最も多く使用されていた。死亡前 72 時間以内に使用された薬剤について、24 時間ごとに比較したところ、昇圧剤を使用した患者の割合は、持続的鎮静施行群では差がなかったのに対して、非施行群では、時間経過に伴って有意な増加がみられた。輸液量については、先行研究と比べ、持続的鎮静の有無にもかかわらず多い傾向にあり、浮腫の発現割合の高さに関係する可能性が示唆された。

## 【方法】

大阪大学病院医学部付属病院で 2008 年 1 月 1 日から 2008 年 12 月 31 日の間に死亡退院した 16 歳以上のがん患者 119 人を対象として、診療記録をもとにレトロスペクティブに行った。

調査項目：性別、年齢、身長、体重、入院期間、原発部位、転移部位、鎮静剤の種類・投与量・投与方法、鎮静期間、鎮静の施行理由、死亡前 72 時間前にみられた症状、併用薬、輸液量、死亡時の酸素の使用量、尿管・胃管、TPN・胃瘻・腸瘻の使用の有無。

死亡前 72 時間以内にみられた症状、死亡前 72 時間以内に投与された併用薬、オピオイドを使用した患者の割合や使用量、昇圧剤を使用した患者の割合、輸液量については、死亡前 24 時間以内、死亡前 48 時間以内 (>24 時間)、死亡前 72 時間以内 (>48 時間)、の 3 つの時間帯に分けて比較した。死亡前 72 時間以内に投与された併用薬において、内服薬は、経管投与されたものを除き、外用薬はフェンタニル貼付薬と坐薬のみとした。オピオイドの使用量は、経口モルヒネに換算した。

## 【結果】

## 1.患者背景とがん部位

施行群：39 名 (32.8%)、非施行群：80 名 (67.2%)

がんの主な原発部位は、血液、肺、乳房、膵臓、肝臓であった。→肝臓がん患者では、持続的鎮静の施行率が低かった (施行群：0%、非施行群：12.5%)。転移部位では、有意な差はみられなかった。

## 2.鎮静剤の種類と投与量

Midazolam：28 人 (71.8%) 内訳 IV：27 人 (69.2%)、SC：1 人 (2.6%)

平均投与量：65.7±74.2mg

Propofol IV：4 人 (10.2%)、Haloperidol IV：2 人、Hydroxyzine IV：2 人

鎮静期間：平均 5.1±7.3 日、中央値：3 日 (範囲：20 分～31 日)

## 3.鎮静の施行理由

Dyspnea：21 人 (53.9%)、Agitation、Pain：各 6 人 (15.4%)、Fatigue：5 人 (12.8%)

#### 4. 死亡前 72 時間以内にみられた症状

(死亡 72 時間以内 (>48 時間))、(死亡 48 時間以内 (>24 時間))、死亡前 24 時間以内

|             |        |        |       |
|-------------|--------|--------|-------|
| Edama : 施行群 | 40.0%、 | 33.3%、 | 38.5% |
| 非施行群        | 36.0%、 | 55.0%、 | 61.3% |

死亡 24 時間以内で、非施行群の方が有意に高い。

施行群の方が有意に高い症状

- ・ Fever (死亡 48 時間以内 (>24 時間))
- ・ Wheezing (死亡 72 時間以内 (>48 時間))

非施行群の方が有意に高い症状

- ・ Pain (死亡 48 時間以内 (>24 時間))
- ・ Fatigue (死亡 48 時間以内 (>24 時間))
- ・ Dyspnea (死亡 72 時間以内 (>48 時間))
- ・ Others (死亡 72 時間以内 (>48 時間))

#### 5. 死亡前 72 時間以内に投与された併用薬の種類

施行群では、注射薬の種類が有意に減少していった。非施行群は、増加する傾向にあった。

#### 6. オピオイドの使用割合と 24 時間平均使用量

施行群では、やや減少していく傾向であったが、非施行群では、やや増加していく傾向であり、使用割合でも非施行群でやや増加していく傾向であった。

#### 7. 昇圧剤の使用患者割合

施行群では各時間帯で差がなかったが、非施行群では時間経過に伴って使用割合が増加し、死亡前 24 時間以内では、他の 2 つの時間帯に比べて有意に高い。

#### 8. 死亡前 72 時間以内に投与された輸液量

平均輸液量は、各時間帯で有意な差はなかった。施行群では、時間経過とともにやや減少傾向であり、死亡 24 時間以内において非施行群で有意に輸液量が多かった。

#### 9. その他

死亡時の酸素吸入の割合・平均使用量、尿管・胃管、TPN・胃瘻・腸瘻の使用割合には、施行群と非施行群で差はなかった。

#### 【考察】

鎮静期間や薬物投与量については、ホスピス・緩和ケア病棟における先行研究と差はなかった。輸液量については多い傾向にあり、浮腫の発現割合が高いことと関係する可能性が示唆された。